令和５年度第１回　今治市総合教育会議　会議録

日　時　　令和 5 年 11 月 20 日（月）午後 1 時 00 分から

場　所　　今治市役所本館２階庁議室

出席者

（構成員）　今治市長　徳永　繁樹

教育委員会　教育長　小澤　和樹

教育委員会　委員（教育長職務代理者）　山本　泰正

教育委員会　委員　長井　俊朗

教育委員会　委員　竹田　美和

教育委員会　委員　野間　真美

（構成員以外）　教育委員会事務局

副教育長　秋山　直人、教育政策局長　正岡　靖彦

次長(兼)学校教育課長　井上　洋、教育大綱推進課長　鳥生　幸司

教育大綱推進課　課長補佐　﨑山　憲一

生涯学習課長　畑　紀輔、学校給食課長　阿部　孝文

総合政策部

交流振興局長　波頭　健、スポーツ振興課長　早川　浩二

文化振興課長　藤井　康隆

（事務局）　総合政策部

部長　森　聖二、企画政策局長　冨田　義勝

市民が真ん中課

課長　馬越　啓之、課長補佐　藤岡　洋

係長　川﨑　智之、主査　越智　進也、主査　月原　悠希

（開会　午後 1 時 00 分）

市長あいさつ

徳永市長

・議題として、教育大綱の変更も挙げさせていただいている。

教育大綱策定後から 2 年、子どもたちにとっての 1 年は大人の時間軸では計れない貴重なものであるという認識のもと、変わることのない理念は大切にしながらも、時代の要請に合わせ変えるべきところは柔軟に対応していきたいと考えている。

・本市の人口減少の大きな要因の一つとして、進学等により、今治市外に転出をした若者の多くが今治市内に戻ることなく、他の地域で就職をしているという状況がある。

本市出身の若者の還流をいかに促していくかという課題認識から、昨年度より今治モデルふるさとキャリア教育を実践している。

小学校 3 年生から中学校 2 年生まで、育っている地域がどんな地域であるのか、今治のストロングポイントはどういうところか、しっかりと教えていくという教育をしていただいており、郷土愛の醸成、生徒の思考力・判断力・表現力を育み、全ての学校での持続的な取組につなげ、結果的には世界を相手に活躍できる人材育成を目指す。

これに加えて、住みたいまち今治に加え、戻りたいまち今治を目指して、再び今治に戻ることを選択肢としてもらいたいという考えで、この今治モデルの浸透を図っている。

こうした取組は一長一短で成果が得られるものでない。今治モデルを展開する中で、多くの皆さんに輪の中に入っていただきたい。

・本日は、子どもが真ん中の視点に立って、全国トップクラスの教育都市を目指すためにどういうことに力点を置けばいいのか、教育委員会の皆さんとしっかりと議論し、方向性を共有させていただきたいと思っている。

議題（１）今治市教育大綱の変更について

馬越市民が真ん中課長

（資料を元に説明）

長井委員
・4ページの変更案「児童生徒の実態や授業のねらいに応じてアナログとデジタルの良さを効果的に組み合わせた授業の質の向上に努めます。」の部分について、文章のつながりとして、例えば、「児童生徒の実態や授業のねらいに応じてアナログとデジタルの良さを効果的に組み合わせることにより、授業の質の向上に努めます。」などとしてはどうか。

森総合政策部長
・委員からご指摘のように、「効果的に組み合わせ、授業の質の向上に努めます」というように修正をさせていただきたい。

山本委員
・変更については妥当だと思うが、それよりもこの今治型の教育ということは具体的にどういうことだということについて、議論ができていないと思う。
　今治型教育とは何かといった時に、文部科学省が出している幼児教育からのシームレスな教育の方向性を具体的に展開していくことが出てこないといけないと思っている。
　そのためには、専門家の知見も頂戴しながら今の教育、いわゆるチョーク・アンド・トーク型の教育のどこに問題があるかという前提で、みんなで協議をしていく過程が必要ではないかと気になるところである。
　このような大事な問題はみんなで共通認識を持ち、ベクトルを合わせて市民を挙げて取り組まなければいけないと思う。

小澤教育長
・学びの繋がりを大切にする、地域全体で子どもたちを支えていくというところは今後、教育委員、関係機関と共通認識を持って取り組んでいく必要があると改めて感じた。

徳永市長
・山本委員からいただいたご提起について、幼児教育から義務教育、そして高校教育までどう繋いでいくのか、もっと言えば大学教育までどう繋いでいくのか、シームレスな取組についてこれまで議論がなかったが、気づきをいただいたので、担当部局にも指示をしながら、よりよい方策を検討してまいりたい。

・教育大綱の変更については、森総合政策部長から文言の修正について答弁させていただいた方向性で進めさせていただく。

議題（２）教育大綱の重点方針の実現に向けた取組の進捗状況について（報告）

森総合政策部長
（進捗状況の確認の趣旨を説明）

鳥生教育大綱推進課長
（資料に沿って報告）

山本委員
・この進捗状況評価等は、現場の教職員やＰＴＡの皆さん、地域社会の皆さん方の認識と合致するのかという懸念がある。
　ある会で児童生徒の部活の問題について取り上げられた時に、いわゆる暗記型教育に違和感を感じた。認知能力と非認知能力を培うことの両方が相まっての教育だと思っている。いわゆるレジリエンス、日本語で忍耐力、あるいは協調性、判断力、思考力などを培うためには、授業だけではいけない。むしろ自然の中でいろいろ遊んだり、スポーツをしたりすることが大事だと思っていて、それが今治型教育の一つだと思っている。だからそういう位置付けで議論をしないと、変な方向に行くことが懸念されると思う。
・もう一点、こういうことをやろうと思ったらまず先に、学校の先生方の働き方改革を本気になってやらないとできない。企業でも同じだが、改革で職員に新しいスキルやリテラシーを求めた時には隙間を作らないと、精一杯の状態でやっているので、働き方改革は待ったなしと文部科学省からも出ているような状況下で、先生の実態にメスを入れずに、何を先生に求めていくのかを真剣に議論せずにいくら議論しても駄目だと思っている。

小澤教育長
・進捗状況の確認にもつながるが、現場の声を大事にするということ、様々な視点、切り口から、現場の声、保護者、生徒の声を聞きながらというところで、部活動の地域移行については、教員もやりがいとプライドを持って部活動に取り組んでいるが、そういったことが子どもたちのためになっているかというとこ

ろを、今治市教育委員会として十分熟議しながら、評価等の声を聞きながら進めていく必要があるのではないかと思っている。

徳永市長

・教育委員会が政策を立案、そして現場で実践していいただいているが、対象となるのは子どもたちの命であり、もし誤りがあるならすぐに直していかなければならない。

全ての皆さんの声にお答えをすることができないところもあるが、色々な声をつぶさに拾い上げて、そして政策に反映をする、ＰＤＣＡサイクルをまわしていくということではないかと思っている。

・部活動の地域移行について、全国三度の優勝を誇る滋賀県の野球クラブで、ノーサインで子どもたちに考えてプレーをさせているということが注目を集めている。

小中学校、高等学校で優秀な成績を収めることが目的なのか、それとも心豊かに育つ子どもたちを育てていく環境、指導が求められているのか、勝利至上主義になると本末転倒になるということはいつも警鐘を鳴らさせていただいている。

教育委員会においてはリソースの問題もあると思うが、誤りのないような形で進めていただきたい。

長井委員

・教員の働き方改革について、児童生徒を前にして日々授業をする教師の立場でいうと、ここまでやったから満足だということは決してない。常にさらなる向上を目指すため、完成形がないとろに、根本的な難しさがある。

子供と向き合ったり、自己研鑽をしたりする時間を確保するために、ＩＣＴ活用や部活動の地域移行を進めている。しかし、部活動を例にすると、それは技術の上達を目指す芸事であり、やはり際限がない。そこがこの仕事の面白さでもあり、そして難しい面でもある。

教員の仕事とは何ぞやという基本的なところを再度確認し、先生にとってのウェルビーイング、幸福な人生とは何ぞやというところにも思いを馳せれば、意識改革は可能である。発想を根本的に変えることが、最も根幹をなす必要不可欠な作業になるのではないか。

山本委員

・民間社会では、いいことでも全体で見た場合にはよくないといったこともいっぱいある。

　例えば、熱心さのあまり、普通のレベルではできないことを生徒に対して指導していく。保護者からはあの先生は立派な先生だと喜んでもらえるが、全体から見たら、それはその人に限ってしかできないこととか、得意な人しかできないようなこと、それを社会的に良しとしている。それを認めると、全体としてこの先生は駄目だと、そういう展開に組織というものはなっていく。

　そのことを踏まえた上で、そういうことに対する目配り、わかった上でコントロールするのが教育委員会の仕事だと思っている。

竹田委員

・学校の先生の働き方改革という点で、教育委員の研修で聞いた話だが、滋賀県では、学校の欠席連絡を電話ではなく、ネットで欠席の連絡をしているようである。

　ただし、それを放っておくとそのまま不登校になりかねないので、欠席連絡はネットで受けるけれども、空いた時間に必ず欠席をした児童のところに連絡することを徹底しているそうである。

　学校の先生からたまに聞くのは、夕方や授業が終わった後に、保護者の方から相談の電話などがかかってきて結構時間を割かれるっていうところもあるので、難しいかもしれないが、基本的にはもう学校に電話をしない、しなくても済むようなシステム、相談事をメールでなどでできれば少しでも先生方の負担軽減に繋がるのではないかと思う。

・不登校の児童生徒のところに、先生自身が家庭訪問などしていただいている。

　これに関して、これも他の市の話だが、スクールソーシャルワーカーや相談員が家庭訪問に行ったりするような市もある。ただその場合もソーシャルワーカーと保護者の板挟みになってしまうことには気をつけないといけないなど、課題もあるかとは思う。

　学校の先生が 1 人ですることが非常に多いというのは感じる。教室に行けない子どもたちがいるので、担任の先生以外の先生など、別の人員も必要となってくる。絶対的に人員が足りてないというところはあると思う。

・研修ではコミュニティスクールの活用の話もあったが、今治市では、残念ながらコミュニティスクールの活用があまりされてない感じがする。

コミュニティスクールをどういうふうに活用していいのかわかっていない方々が委員になっている気がする。また運営していく校長先生方もどういった話し合いをしたらいいかわかっていないのが現実ではないかと強く感じているので、コミュニティスクールをどう活用していけばいいか、もう少し勉強していただきたいと感じている。

野間委員

・研修を受けて、やはりコミュニティスクールとスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの役割が大事であるが、まだ今治市では遅れていると思った。

先日の広島の研修で、分科会の班の中でいい取組をしていると言われていたのが吹田市だが、予算がかかることが多いがどのように財源確保するのかを聞くと、まさにこの総合教育会議で問題点を明らかにして、そこに重点施策、力を入れるようにしているということだったので、そういうやり方でどんどん進めていけばいいと思った。

・働き方改革について聞いてなるほどと思ったのは、宮崎市の方が、学校を病院と同じようにイメージしてくださいと言っていたことである。

医者がレントゲンを撮ったり、薬を処方したりはしない。医者さんは自分が患者に向き合ってやらなければいけないことだけをやる。薬剤師や検査技師、看護師の仕事はそれぞれのプロフェッショナルがやることで、質の高い業務に集中することができると言っていたので、確かにそう考えれば、学校の先生ももっと勇気を出して、自分の仕事を切り離して改善することができるのではないかと思った。

こういう仕事を見直したらどうかというのは、教育委員会と学校がどんどん活発な意見が出るようにしていったらいいと思う。

徳永市長

・大変示唆に富んだお話で、市長部局も共有をしなくてはいけないと思う。他の県市が先進的な取組をしていると思う。

委員からも様々なお話があったが、どこをどういうふうにかいつまんで今治の教育委員会のるつぼの中に落とし込み、そして負担の軽減ができるのかについては、小澤教育長を中心に、もう一度研究、検討を深めていただいて、できることから実践をしていただくようにお願いしたい。

長井委員
・働き方改革については、やはりＩＣＴの有効利用が大切である。教育ＤＸもそうだが、喫緊の課題である。今治市では、令和４年度にスタディサプリを実験的に導入した。その際に課題として提示した、学力の伸長、教師の生産性の向上、生徒と向き合う時間を増やせるのか、ということについて伺いたい。取組が進んでいる中で、今後の課題等についてもお聞かせ願いたい。

小澤教育長
・ＩＣＴの活用ということでは、スタディサプリを今年度導入させていただいた。
　長期休業中、学校によっては夏休みの課題を子どもたちには与えない学校もあるが、その中でスタディサプリの活用は活発であった、また子どもたちが自らどういった勉強をするか選択できるようなサプリなので、そういった中で子どもたちが個別最適な学びができているという結果も確認できている。
　これから自立した取組を子どもたちにさせるためには、一つの有効な手だてだと認識することができた。
・教職員の働き方改革についても、ＩＣＴの活用で朝の出欠の確認等を学校によってはマチコミで確認することや、タブレット端末で、朝学校に来ることができていない子どもにタブレットで朝の会の様子を見させるとか、実際に担任が家庭訪問をしないで子どもたちの様子を確認できるといったところもある。他にも、調査書や通知表に出欠状況が全て書類等に反映できるような仕組みを学校の方で市内統一できている。
　そういったところで改善は十分できている部分もあるが、まだまだ時短といったところにおいては足りない部分があるかと思うので、学校の状況を確認しながら、教職員の幸福度と、大変さの両方の視点から、色々な有効な活用策を考えて参りたい。

長井委員
・改革は必ず痛みや厄介な面を伴うが、ぜひ「未来」に焦点を当て、ありたい姿を描いて前向きに進めていただきたい。

山本委員
・先生方には、統合的校務支援システムというものがあるが、現在、今治市教育

委員会が採用している校務支援システムは、ネットワークのオンプレミス型の支援システムである。

あえて今日発言させていただくのは、予算関係で市長部局の方がいるので、私からの意見ということで受けとめていただきたい。

今年度教育委員会が発出した一般方針の中に、クラウド型を検討をするという言葉をようやく入れていただいた。文部科学省は今、働き方改革、アダプティブラーニングを展開するにあたって全てクラウド対応を前提にして様々な通達を出していると思う。

しかし、今治市の教育委員会の方では、オンプレミスの方が安価であるからと判断しているが、安い高いの問題ではないと思っている。どういう展開ができるかが大事なのであって、今治市の場合は全国有数の教育システムを展開していこうというところで、まず学校の先生方の働き方改革、新しい学習指導要領をベースにした探求型学習、個別具体的な学習、協働的な学習を展開していくためには、クラウド対応を前提にして様々な通達が出されている。それについて予算が絡むことなので、将来の展開力、今治市が目指しておる教育のあり方を加えて検討いただきたい。

大局的な見地から早くクラウドに移行すべきだと思っているが、予算の問題もあり、よくよく検討が必要だと思うので、研究をいただいたらと思う。

徳永市長

・この場では様々なご指摘をしていただきたいと思うが、ぜひそのあり方については定例の教育委員会など様々な場でご議論いただいて、市長部局にお繋ぎをいただきたい。

様々なことを投げ込んでいただいた中で、プライオリティを決めていくのはまさに教育委員、そして教育委員会の皆様だと思っている。それを私どもが予算査定をさせていただいて、市議会にお諮りをさせていただくことになっているので、ぜひ皆さんの立場からもお願いしたい。

竹田委員

・スタディサプリについて、テスト勉強や中学校の夏休みの宿題もスタディサプリが活用されている。夏休みの宿題は従来型のプリントもあったが、子どもたちは、先にスタディサプリの宿題、課題をして後からプリントに取り組むなどしており、すごく取り組みやすいと思う。

保護者として子どもたちもしっかり活用しているというのは実感しているが、タブレットで学習しているので、書く力、読み取る力などが少し低下してきているのではないかとも感じている。

野間委員

・ふるさとキャリア教育で、今治の良さを再認識するような取組、子どもたちが学校外で学ぶところがあると思うのだが、やはり感動したことが大人になってもずっと胸の中に残っている。

小学生が地元の魅力を感じる行事が多いのはとてもいいことで、それが友達と話していても、都会に出た時に地元の魅力っていうのを話すときにポロッと出てきたり、将来戻りたいなと思うことにもなると思う。学校に行っている時は子どもたちもありがたさがよくわからないかもしれないが、大切だし、こういう学校外のイベントを工夫すれば学校の先生の負担も減るとも思うので、こういうことは引き続き力を入れていっていただきたいと思う。

徳永市長

・海の豊かさを実感することがない、海水浴の経験がない、山で育った経験がないまま専門学校・大学生になったり、就職をする子どもたちが多いが、様々な魅力があるのが今治市のストロングポイントだと思っているので、ぜひそういう工夫をしていきたい。

バリが真ん中未来セッションで高校生とも向き合っているが、高校生に話しているのは、令和の時代は心の豊かさであるということ。遊びに行くときには浦安市や大阪市のようなところに行っていただいて、やはり生活拠点は全てが揃っている今治市がいいんじゃないのというお話をできる限りするようにしている。若い方々も行動範囲が狭くなり、今治市も広くなっているので、色々な地域のイベントに参加することは難しいと思うが、この辺りはぜひ教育委員会と連携をして様々な取組を深めていきたい。

議題（３）全国学力・体力調査の結果を受けた今治市の教育について

井上学校教育課長

（資料を元に説明）

長井委員
・個別の学力の問題に入る前に、昨年に引き続き欠食の問題についてお尋ねしたい。昨年は明確に理由の提示はなかったと記憶している。
　生活の基本が整わないとなかなか学力向上に繋がらないと思うので、焦点を絞ってまずお尋ねしたい。

井上学校教育課長
・明確なデータ、アンケートを取ったわけではないが、現場の教師から現状を聞くと、まずは保護者が朝食を食べる習慣がない家庭があると聞いた。
　また、朝起きるのが遅い。その理由は、寝る時間が遅い、やることがたくさんあるということを現場の教師からは聞いている。

畑生涯学習課長
・（朝食の欠食などを補完する組織としての）子ども食堂について、各公民館なども活用いただきながら、子どもの食事の提供などを通じて、食育等に取り組まれている学校・団体がある。把握しているものでは、鳥生校区、乃万校区、別宮校区の３つの校区で昨年度取り組まれていたということを把握している。

長井委員
・関連する質問になるが、ウェルビーイング、自己肯定感といった獲得的要素が大事だということが第４期教育振興基本計画で強調されている。それを踏まえて学力調査における質問内容が昨年と比較して変化している。そのことに関して、何か考察があれば教えていただきたい。

小澤教育長
・学力学習状況調査の生活調査の質問紙調査の中で、今治市の小学生・中学生ともに、自分には良いところがあると答えた割合、このほか、私は将来夢がある、先生は私の良いところを認めてくれるといった質問紙における質問の中で肯定的な意見が、愛媛県や全国よりもかなり高い値になっている。
　自己肯定感が高い、自分を大事にすることで相手も大事にできる、といったところについて、愛媛県、特に今治市の小中学校の中ではそういった教育活動が実現できているのではないかと思う。

山本委員

・県内での比較は当然必要だとは思うが、全国有数の教育都市を目指そうとしていることを踏まえると、今治市のこの学力調査の結果から見た水準をどう見るべきか、そういう見方をしないといけないと思う。

松山市との比較においても、愛媛県で一番高い点数を獲得していると認識しているが、相当の開きがある。ここには何か大きな原因があるはずだと受け止めて対処するのは当然だろうと思う。そういうことに対しても十分に議論できていない。

文部科学省の出題の用紙についての設問趣旨から見た今治市の今の教育のあり方について一考を要するのではないか、そういう疑問を持つのが普通ではないかと思っている。

改善のポイントについては現場の先生方のご意見を十分聞いて作っているとは思うが、やはり問題を共有して、問題解決の当事者にいろいろ実態を十分聞いて把握しておくというふうな前提が全ての原点だと思っているので、今後に生かすためにはここのところを十分押さえておいて欲しいと思う。

竹田委員

・朝食の欠食について、学校教育課長がおっしゃったように、親の朝食を食べる習慣がない、朝起きるのが遅いということが要因というのは確かだと思う。そのほか、女子生徒であればダイエットを気にしているといったところもあるのではないかと思っている。せめて、バナナ１本、ヨーグルト１個でも口にしただけでも違うと思うので、そういったところも指導していってもらえればと思う。

・体力の向上に向けて、私たちが小学生の頃は、スポーツテストで１級バッジというものがあったように思う。それがあるから体力がつくというわけではないとは思うが、何か子どもたちに目標のようなものがあれば、そういったところで体力を向上させるための目標にはなるのではないかと思った。

・いじめの認知件数について、令和３年度より少し増えているということだが、私はこれは全然悪いことだとは思わない。

認知件数イコールいじめ件数ではないと思っている。いじめが認知された、認知件数が増えているということは、それだけ解決なり問題を考えることができる件数が増えてきているということなので、きちんと教育委員会に報告が上がってくる件数が増えているというのは決して悪いことではないと思うので、上がってきたものに対して放置せず、きちんと解決していけるような形を取って

いただけたらと思う。
　また、実際に、解決したと思っていたいじめが数年後に重大事態になるという事例もあるので、解決したからと安心せずにその後もフォローなどしていけるようにしてほしいと思う。
・学力向上に関しては、何をもって向上とし、何を目指して向上させるのか。テストの点数なのか、社会に出てからの学力を身につけるという学力なのか。テストの点数だけで見ると、一夜漬けなどで一時的に点数が取れて学力向上したと勘違いしてしまうところもあると思うので、何をもって向上というのかというのも明確にしていただきたい。

野間委員
・学力も体力も、もし数値を上げようと思えば苦手な子に何か対応してあげられたら違ってくると思う。誰一人取り残さないという意味では、苦手で困っている子を何かのきっかけで、先生の残業にならないような形で、何かできれば、モチベーションが上がり、良い雰囲気になるのではないかと思う。
・誰一人取り残さない教育という意味では、学校のテストだけができるというよりは、将来自立したたくましい大人になることを目指すものだと思う。
　小・中学校で将来の夢について聞かれることが多いが、今治市の中だけではなかなか自分の将来の夢をまだ小・中学校では見つけられない子が多いと思うが、どうしても学校で書かないといけない場面が多く、真面目な子どもはそれで悩んでしまう現状もある。
　私は夢が見つけられないからいけないと思ってしまうこともあると思うので、夢が見つけられなくても、一生懸命頑張っていることを受け入れてくれるような学校の雰囲気にしてもらった方が、将来の夢がきちんと決まっていなくてもいいんだよというふうに持っていってもらうことも、不登校を減らすことに効果があるのではないかと思う。
　学力・体力を上げるのは、将来、自立したしっかりした大人になるためだと思うので、長期的に見て取り組んでいただけたらと思う。

秋山副教育長
・トータルに色々な形で、色々な方面から判断をしていかなければいけないと思う。
　学力向上の中には、英語教育の充実も資料の中に入れさせていただいている。

質問紙調査の中で、英語に触れる機会があったかという設問について、今治市の子どもは全国の子どもに比べて低いといった結果もある。

できる限り、できるところからというところで、色々な課題を整理しながら少しでも対応できるような充実策を考えていきたいと思っている。

山本委員

・教育の問題について専門家の本を読んでいた時に、教育にはタイミングがあると。また3つの「かん」という言葉を使っていたが、感受性の「感」、いわゆる勘の「勘」、観るの「観」を年齢に合わせて鍛えていくということがとりわけ大事だとあった。

専門的で大切な事柄であるので、専門家等の意見を十分取り入れて、本気で取り組むことが大事で、それこそ今治型教育プログラムではないかと思う。

市長が言われるような、目標とする到達点に対してバックキャスティングで今何をしていくかということを展開していかなければいけないと思う。

徳永市長

・教育の議論は誰しもが評論家でアプローチしやすい議題ではあるが、本市の子どもたちが豊かに伸びやかにやっていける環境はどういうものなのかということについて、教育委員には教育委員会と表裏一体で取り組んでいただきたい。

議題（４）ふるさとキャリア教育について

井上学校教育課長

（資料を元に説明）

野間委員

・今治市の産業について、今治市民から見ても誇りを持てる企業が多いので、そういう色々な企業、産業があることを知ることができる機会は、今治を誇りに思うことができてとてもいいことだと思うし、しっかり勉強して将来紹介できるようにして欲しいと思う。

今治市は英語に触れる機会が少ないという調査結果があると聞いたが、例えば小中学校で英語で今治市の産業紹介をしてみるなどすれば、大人になってからも今治の宣伝などもできるし、自信にも繋がるのでいいのではないかと思っ

た。

竹田委員
・若い子どもたちが世界に行く、都会に行くというのはすごくいいことだと思うが、やはりふるさとで就職、最終的には戻ってきて欲しいという気持ちがある。そういった中で、ふるさとキャリア教育で中学校 2 年生が最終でプレゼンをするというのはすごく面白い試みだと思う。こういう産業が今治では有名だというのを、進水式への招待など、幼稚園や小学生の頃から今治の産業に触れてもらうのはすごく大切だと思う。

長井委員
・喫緊の課題である人口減の歯止めと人口流出の均衡化に努めるため、教育の果たす役割は大きい。
　今治工業高校に造船科を設置した時に、地学地就をキーワードにした。コンセプトは、地域で学んだ子どもが大人になって地域の産業に従事し、地域の発展に貢献する、そして今度は自分が地域を担う子どもを育てていく、そうした好循環の確立を目指したものであった。そのベースとなるのは郷土愛であり、地域の良さを知り、地域に誇りを持てるようにと、小・中・高すべての学校段階において地域と連携した様々な活動を進めた。
　また、えひめジョブチャレンジ U-15 事業について、県教委として池上彰氏に講演を依頼したときの文書の一部を紹介したい。
「将来の予測が困難な時代にあっても、人間性豊かな生活といったものを営むためには、事実を正しく捉え、他者と積極的に関わるコミュニケーション能力の基盤となる読解力を育成することが極めて重要です。愛媛の児童が、読書の力、楽しみを改めて実感し、日本語を正確に理解し、繊細で深みのある表現力や高い思考力を身につけ、自分で自分の生き方を決定できる人に育ってほしいと願っています。」
　最終的には、池上氏から『仕事を決めるということは、将来自分がどんな形で人や社会に貢献するのかを考える旅ともいえます。「君たちはどう生きるか」正解は一つではありませんから、ずっと自分自身で考え続けてほしいと思っています。』という愛媛の中学生へのメッセージをいただくことができた。
　様々な取組の中で、ベースとなるしっかりとした職業観を育みたい。決して、今治から出ていくのを妨げ、身近な幸せで満足しろというのではない。「故郷で

錦を飾る」ふるさと今治を愛する心の醸成にこれまで以上に取り組むことを、改めてお願いしたい。

山本委員
・キャリア教育というのは、世の中がどんどん変化していく時代、教育振興基本計画の中ではっきりと不確実・不透明、変動が激しいという英語の頭文字をとってVUCAの時代と書かれているが、そのような激しい変化の中で人間が生き抜いていくその生きざま、これが端的に言えばキャリア教育と受けとめている。
　自分自身の問題・課題を発見して、リカレント教育やリスキリング教育など自分で主体的に勉強して世の中の動きに対応していく。時代の変化に強靭に対処できる能力、そういう捉え方で受け止めないといけないのではないかと考える。

小澤教育長
・学力とはどういったものかというと、子どもたちが将来よりよく生きていくための力もその一つであると、説明させていただいたふるさとキャリア教育も同じではないかなと思う。
　子どもたちが体験活動を経験することによって、将来自信を持って取り組んでいけるための自立型学習をすることをキャリア教育で身に付けて、発達段階に応じ自分は何になりたいのか、何ができるのか、そういった意識を持たせることが大事だと思っている。

市長閉会あいさつ

徳永市長
・今日いただいた様々なご議論を、校長会、教頭会、ＰＴＡ、商工会議所、地域、色々なところに広げていく必要があると思う。
　教育委員会だけでは対応できないことはもう皆さんもご存じの通りだと思うので、多くの方を巻き込んで、子どもたちに良い景色を見せてあげてもらいたい。
　そして学びと気づきを繰り返しながら、人間力が育めるような、そういう環境を作っていってもらいたいと思っている。絶えず前にという思いでこれまでも進んできたが、ぜひ多くの子どもたちの様々な可能性を否定しないようにしてもらいたい。
　私たちが学生の頃とは違って、複雑多様化した問題も多く、保護者の皆さんも

学校の先生方も困っているのかなと思う。それでも何とかしていかなければならないのが私たちの使命だろうと思う。

私は 1,740 以上の自治体がある中で、今治市はトップランクのまちだと心から思っている。資源も風土も人も、本当に素晴らしい方々、素晴らしいものが集まってこの今治を継承をしていただいている。子どもたちのために、ぜひみんなで知恵を出し合ってもらいたいと思う。

ふるさとに錦を飾るでもいいし、ふるさとで錦を織る、そういう人材も必要ではないかと思っているので、ぜひ今日のようなパッションを持ち続けていただいて、定例の教育委員会、そしてまた総合教育会議においても、様々な議論をしていただくようお願い申し上げる。

（閉会　午後 3 時 30 分）

以上